

## フットボールにおける造形美術デザインの表現研究と教育 — 総合大学における造形美術教育指導の立場からⅡ —

藤崎 いづみ

キーワード：フットボール(サッカー)、繋がる、連携、ポジショニング、LINE、表現研究

### 概要

本稿は、桜美林大学総合文化学群(2013年度からは芸術文化学群に名称変更)造形デザイン専修2012年度卒業年次の学生と共に、筆者が立ち上げた自主ゼミの教育成果の報告である。

この自主ゼミでは、フットボールをテーマとして様々な事を分析・考察・論説し、学生自身の造形表現と研究に結びつける教育システムをつくり、実施した。

それは、フットボールという視点から考察すると、より特徴的に観察できる国際観であり、文化、芸術・デザインの研究である。時に研究室で、時に制作アトリエで、又、時にそれをLINE<sup>1</sup>という現代のSNSを駆使し、語り、論じ、学生達は造形美術デザイン表現の研究領域へ具現化していった。

筆者は、フットボール・表現研究・教育という、3連携のこだわりと面白さに着目したのである。大学教育は学生に付加価値を与えることであり、育成支援、フットボールの世界のカンテラ組織<sup>2</sup>の様であり、フットボールを通して、学生の表現と教育連携が出来ると思ったのである。

以上のような実践を考察することから、今後の課題へつなげていくこととし、新しい教育理念にゴールしたいのである。

## 1. はじめに

筆者の考える自主ゼミのあり方は、フットボールを通して様々なことを分析・考察し、学生自身の造形表現と研究に移行していく教育プログラムを構築した。そこから、卒業研究に至り、学外研究発表会として2013年2月18日～3月3日の期間において「アトラボはしもと」での企画展「基点と起点 (Basic & Challenge)」における地域交流と研究発表のプロデュースを、自主ゼミ学生と他後輩ゼミ学生達が、ひとつのチームになり、筆者と共に実行していった。

企画展「基点と起点 (Basic & Challenge)」の「ART&SPORT フットボールと造形美術・デザインの表現」での作品発表は、自主ゼミ3学生の卒業研究制作作品を、より探求した研究発表コーナーである。会期初日キックオフイベントでのトークショー「フットボールが教えてくれたこと」への波及効果や、学生の成長に至るまでの経緯を記述する。

筆者は、フットボールをきっかけとして学生と語り合うことにより、学生の繊細な心の琴線に触れると気がついた。学生のモチベーションにアクセスすることで分かる、学生の心の叫びがある。この教育体験は筆者にとり重要な気づきの時間であった。それは、学生の偶然の思いつきから、現代情報ツール LINE の活用をきっかけに始まった。しかし、彼等はまぎれもなく、新時代の情報ネットワークシステムに生きる世代である。

2009年秋、武蔵野美術大学80周年記念フォーラム「世界美術大学学長サミット」が開催された。これは国内外の美術大学の学長、学部長によるシンポジウムで、美術大学の時代的使命と美術教育の意義を検証する大会である。基調講演のシカゴ美術館附属美術大学総長トニー・ジョーンズ先生の講話は、以下の様に述べられた。(朝日新聞、2009)

今、美術大学は旧世代にとっては異星人のような、デジタル時代と情報革命の落とし子を学生として迎えています。彼らは膨大なイメージのコレクションにより、スタイリッシュでセンスの良いものをつくりあげる能力にたけています。(以後、略)

筆者は課題として、教育システムは時代的に学生の資質に合わせていくもの、と考え、LINE ツール上で学生と情報デザイン教育の始めの一步を歩み出した。

そして教育とは、履修ガイド上や教務上の設定された枠組みを越えて、学生の人生の喜怒哀楽と向き合うことにより、思いがけない指導の効果や感動があり、学生の表現したいことや研究テーマにたどり着くことがあり得るのである。筆者にとり、新しい方針による教育への取組みとなったように思う。そして、学術研究や教育のプロセスは、フットボールの理念と類似していると思う。次世代につなぐこと。「つなぐ、つながる」という教育指導スローガンを基点として、学生と共に表現研究というゴールに向かった。フットボールの試合では、選手入場で両チームはエスコートキッズと手をつなぎ入場行進する精悍な姿がある。何かを信じて心から応援したいと願う強さ、挑戦して前向いていくたくましさ、教育の基本スローガンと類似するように思えてならない。

## 2. 実践例

自主ゼミ3名の学生の表現研究事例を紹介する。

### 2-1 フットボールにおけるデザイン・絵画表現領域

#### 『KING OF CLUB TEAM『TAKAHIRO FC』』4年横澤高広

フットボーラーは、様々なナショナリティを経験吸収してグローバルな生き方をする。横澤君は、世界の名サッカー選手のポートレート、生き様を描きたい、という志であった。4年間で学んだ表現・技法を全て出し切るという士気を持って、自らの約束事を決めた。造形デザイン専修での学習成果である、アートとデザインの分野での様々な技法・知識で最大限の自分の色を出すことである。それは、キュビズム<sup>3</sup>的絵画表現を研究考察し、オリジナルキュビズム様式「カクタロウ」という直線主義とフリーハンドで描くことであった。以下、本人の卒業研究レポートより

「カクタロウ様式表現とは、中学生の頃から興味を持ち尊敬する画家のピカソのキュビズムからヒントを得ている。直線での面白さや、一見人工的というか、自然らしさに欠けるが、その中で表情や心情が伝わる表現を目指した。プロサッカープレイヤーを世界中から選抜し、ベストイレブンを私の独断で決定する。賛否両論あるがこの選抜は人物の個性と知名度、自らの好みが反映している。私だけのドリームチームを作り、そして私なりの独自の表現で人物を描く。サッカーは11人制なので11人をまず描き、特に注目すべき選手(本田圭佑<sup>4</sup>、クリスチアーノ・ロナウド<sup>5</sup>)の二人を等身大で描いた。又、会場もサッカーブースという空間を作り、グラウンドをイメージしたパーテーションなど、臨場感にもこだわった。」

横澤君は、ポートレートでは選手のナショナリティを色で表現した。絵画表現では色彩は重要なポジショニングであり、その繋がりから発想し、筆者とアイデアについてよくLINEで議論した。以下、LINE履歴から。横澤「先生、スナイデル<sup>6</sup>は日本画でやりたいです。カラーはオランダのユニフォームのオレンジ系。インテル<sup>7</sup>のブルー系。スナイデルのサッカーは



日本画 / スナイデル 40.9cm × 31.8cm

クールな印象がありますが、点を決めたときやプライベートコメントでは非常に人間味を感じます。オレンジがその役割を果たせるかと思います。」筆者「スナイデルは何と言っても長友<sup>8</sup>との交友関係。今、年俸問題で移籍が噂されていますが、以前、長友がいるからインテルに残りたい、と言っていたので、その意味でも青はサムライブルーで、オレンジと青でいいです。この2色は岩絵の具<sup>9</sup>で充実していますから。選手の色の選択理由も考察としては面白い。将来の夢、スポーツウェアのデザイン、カラーリングの仕事にも繋がる気持ちで。この調子で。」

LINEは有能な現代のコミュニケーションツールであるが、表現や考察の記録としての価値があると認識する。あくまで、筆者は重要な指導は会話、対話を優先した。研究室で対面すること。制作アトリエで指示すること。電話で語ること。そこには、LINEを利用し気づいた、指導上のマッチアップから生まれる教育の生産性がある。横澤君の創造性は、他にグラフィックデザイン表現研究の成果としての、レイヤー<sup>10</sup>をいかして、世界の名ディフェンダーであるプジョル<sup>11</sup>の筋肉質でキュビズ的な個性を、紙の半立体レリーフに仕立てた。

考察は以下の卒業研究レポートからも伺える。

「プジョルという選手は、屈強でまるで岩のような強靱な人物である。モノトーンにし、レイヤーのように前へ前へ飛び出す表現にしたことで、影ができ半立体としての面白さが生まれた。」

また、スペイン代表でFCバルセロナ<sup>12</sup>の主力選手で世界の心臓と名高い、MFイニエスタ<sup>13</sup>の考察と、アクリルボードに彩色しカッターで掘る表現での試みは、次の卒業研究レポートからも伺える。



紙立体 / プジョル 29.7cm × 42.0cm



アクリル彫刻・マーカー彩色 / イニエスタ  
29.7cm × 42.0cm



「イニエスタだが、彼には本当に苦労した。トリッキーで予測不能のプレイスタイルから私は、明らかに違いがわかる表現にしたいと考えた。そこで出たのがアクリルボード。1cm まではいかないが分厚く、傷をつけて描くには大変苦労した。イニエスタという男は侮ってはいけない。」

「本田、ロナウドは等身大で色が対(青と赤。銀と金。白と黒)であり、とくにこだわった。平面にも限らず、ワールドカップをオリジナルでアレンジした『TAKAHIRO CUP』は新しい自分への可能性への挑戦で、多くの先生や多くの方々からの支援があったからこそ完成した。決して一人だけではできない、人と人が受け入れ合い、わかりあい、支え合う精神はサッカーも卒業研究制作も同じだと実感した。」

更にフットボールの中の色について語ったLINE履歴から。

横澤「今日の進捗です。本田がJAPAN ブルーなため、やはりロナウドは赤系にして『青い魂と赤い魂の対立』として、対の意識を高めたいと思いました。」「ロナウドの色下図です。水彩画風にアクリルでやりますので、ポルトガルの色で補色でも調整できるかと思います。」筆者「制作の士気、上がってますね。ロナウド考察は何と言っても筋肉美とエゴイスト。私的には等身大作品は派手にしたいです。本田もロナウドも派手な選手です。」

LINE履歴は、学生と制作表現方法を語った後にメモとして残る良さがある。時代的に良いこと、新しいことを指導に活かすこと、それを学生に提起し学生が実現する様に導く。教員が時代を先取りして、何かを変えていこうとする事に、教育の楽しさがある様に思える。以下、横澤君の制作キャプションと作品を紹介する。

#### KING OF CLUB TEAM「TAKAHIRO FC」

「真剣勝負の中から」

私は小学一年次から高校三年次まで、少年団・クラブチーム・部活動といったサッカー団体に所属していた。幼い頃からサッカーと付き合ってきたが、やはり私にとって、サッカーと言えば「戦い」である。相手チームとの戦い、チームメイトとのポジションの座をかけた戦い、現役時代に私は身をもって感じ、戦ってきた。スタジアムやテレビで観るプロの試合では、地域同士の試合、国の誇りをかけた代表戦、サポーター同士の応援の戦いがある。「戦い」。この言葉だけみると争いや暴力を連想してもおかしくはない。しかし、私の言いたいことはサッカーでいう「戦い」は決して、暴力的でも、汚いものではないということである。

現代の世界は平和である、そう感じている。細かく言えば、内戦や紛争など、解決しなければならないことが、山ほどあることは事実だが、世界におけるサッカーの役割は大きいはずだ。国同士が国民と共に一つになって、対戦相手を敬い、戦う。本気でぶつかり合うからこそ、相手を認めることもできるし、世界でメジャーなスポーツのサッカーでの戦いが、国民を巻き込んで平和につながっているのではないだろうか。対戦相手がいるから、サッカーができる。チームメイトや良きライバルがいるから楽しい。このことは私を含めて、サポーターである方々も同じ思いであるはず。このような考察から、私は「戦い」をキーワードにし、私の主観で選んだ個性と上手さを兼ね備えた、ドリームチームを制作した。



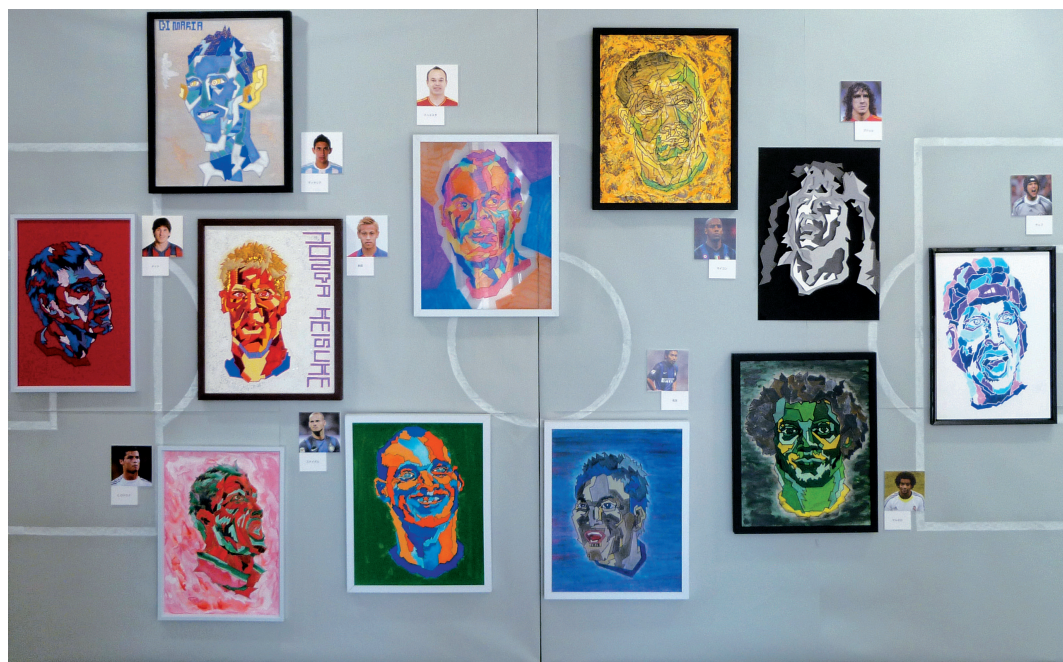
油絵 / 赤のストライカー  
202cm × 90cm



日本画 / 本田圭佑 40.9cm × 31.8cm



アクリル画 / 青のストライカー 202cm × 90cm



KING OF CLUB TEAM「TAKAHIRO FC」 162.0cm × 260.6cm

横澤君は KING OF CLUB TEAM「TAKAHIRO FC」の最終考察で、チームの戦術分析「超攻撃的サッカー」とクラブチームのユニフォームデザイン（ホーム&アウェイ）を総論とした。

## 2-2 フットボールにおける日韓文化交流考察

### 「2002年日韓W杯スタジアム地図」4年郭秀隣

フットボールの世界において日韓戦という言葉は、ある意味フットボール用語といえよう。そういえば、日本と韓国における日韓関係は様々な分野で語られてきた。2002年日韓共催ワールドカップは記憶に新しい。この頃から、日韓という単語はよく耳にする様になったと思う。フットボールにおける日韓戦は、常に意識される伝統の一戦であり、その位置づけは大きく、分析・考察の意味、楽しさがおおいに期待できるのである。

韓国からの留学生、郭君は2013年度から武蔵野美術大学大学院造形研究科デザイン専攻写真コースに進学し、研究テーマは「日本と韓国の共通観と相違観」である。研究者としての日韓考察と、その媒体である写真表現を追求し、両国の文化的な絆を探りたいと語る。今後、研究者として日韓文化交流という視点での分析と考察の序章で、卒業研究では「日本・韓国ハンドブック」を制作し「2002年日韓W杯スタジアム地図」として、デザインとイラスト表現で、フットボールの視点から日韓関係の考察表現を試みた。それは、日本と韓国のサッカースタジアムを比較、分析した作品であり、サッカースタジアムは、その国の文化やデザイン・芸術性が反映され、愉しく日韓文化を見据えられる。以下、LINE履歴から。

筆者「ところで、日韓関係の基は例の朝鮮通信使です。つまり、W杯日韓共催も概念はこんな時代からなのです。通信使により、様々な文化がもたらされた。楽器の考察は面白いですね。韓国はエンターテイメントが独特で、その辺りの考察は楽しいかも。」

郭「ありがとうございます。いつも、先生からインスピレーションもらってます。引き出しに入れときます。今後、日本での韓国の文化的足跡を尋ねる取材をしてみたいです。」

ここで、日韓サッカー国際試合の変遷の記憶を記す。日本のサッカーの栄光の始まりは、1968年メキシコ五輪での銅メダル獲得であり、W杯では1998年フランス大会が初出場になる。韓国は2012年ロンドン五輪の銅メダル獲得は記憶に新しく、W杯は1954年スイス大会が初出場。また、2002年日韓共催では韓国4位獲得、日本ベスト16は、共に初である。

郭君とのフットボール談義では、時に意外な方向に展開した。それは、日韓戦のスタジアム空間は常に異様な緊迫感だが、別視点からは、そのスタジアム空間の色彩が楽しいテーマを引き出した。以下、LINE履歴から。

筆者「色彩の考察として、赤と青は日韓のサポーターの色2色ですが、韓国国旗はその2色が象徴ですね。ところで、チマチョゴリの色は赤と青はいかがでしょう。岩絵の具で赤と青は色数は豊富です。天然、新岩、共に。チマチョゴリと和服は形態が袋のようで、たたみやすく、似ているなあ、と思います。サッカーパンツもまるでフレアスカートの様でサッカーのユニフォームも袋の様な形態で、風通しをよくし、着物同様保温効果もあるのでしょね。ところで、私は教育と学生を通して、日韓文化交流しているみたいです。」



郭「僕も最近日は韓文化交流の仕事の感じがします。色々勉強して、自分も日本の架け橋になりたいです。日本と韓国の生活面から、文化面他、様々なところまでの共通点の中の違い、違いの中の共通点を探っていきます。努力しますのでよろしくお願いします。」

郭君は造形美として、丸い形・円・サークルにこだわりがある。これは、円はグローバルで、地球、サッカーボール、サッカーではキックオフ前に円陣を組むこと、からの発想である。日韓の違いについて、人間的なところでは国境はないと考え、そこから円、繋がっていく意味や形態にこだわりがある。その様な観点から作品は、日本に住む韓国人のため、韓国に住む日本人のためのハンドブックの一つのカテゴリーとして、2002年日韓W杯スタジアム地図をデザインした。一方は韓国地図上にサッカースタジアムを配置し、その建築造形的考察を日本語で記し、一方は日本地図上にサッカースタジアムを配置し、その建築造形的考察を韓国語で記した。また、それを発展させ、それぞれの国のスタジアムの地域のご当地グルメ紹介も分析・考察し、デザインし、遊び心を利かせたのである。以下、郭君の制作キャプションと作品を紹介する。

#### 2002年日韓W杯スタジアム地図

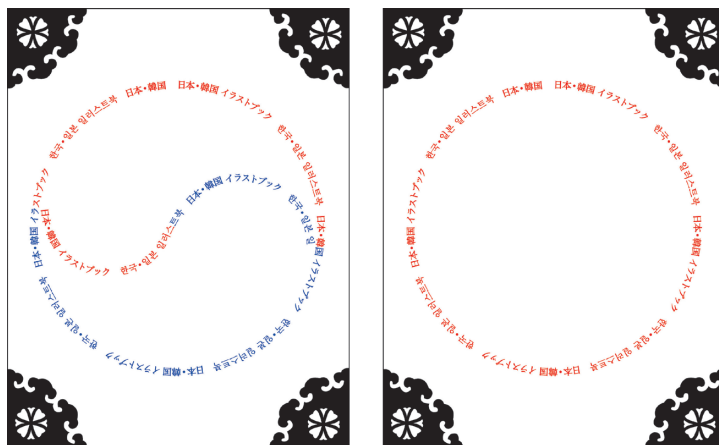
「対戦相手からチーム仲間」

韓国と日本は近くて遠い国と呼ばれている。

両国は似ているが、違う国である。文化や生活習慣も異なるため、韓国と日本は対戦相手であるかもしれない。

そんな対戦相手が、2002年はお互い一つの目標を持って一緒にワールドカップを成功させた年である。サッカーは丸いボールを持って、円陣を組み、一緒に多くのことを共有するスポーツだと思う。たとえそれが敵だとしても同じの空間の中で、お互い一つになる時間である。「対戦の相手は敵ではない、同じグラウンドの中で一緒に走るチームの仲間である」と前イタリア代表「マルディーニ」が言った言葉である。

そのように、韓国と日本が一つになった「2002年ワールドカップ」を思い出しながら両国のスタジアムを描いてみた。スタジアムは形も環境も異なるが、サッカーという「ひとつ」の共通点でできたものである。



グラフィックデザイン / 日本・韓国ハンドブック表紙 各 12,8cm × 18,2cm





### 2-3 フットボールにおけるドキュメンタリー写真表現と考察 「spectacle」4 年神山和久

桜美林大学は「FC 町田ゼルビア」のオフィシャルスポンサーとして、玉川大学と共に地域貢献・教育連携プロジェクト「COUMS」として、このクラブチームを活動支援している。

神山君はその「FC 町田ゼルビア」の試合を取材し、一年間撮り続けた。高校時代は情報技術科で PC など学び、機械好きで、大学ではカメラに興味を持ち、カメラは色々な部品に役割がありフィルムに写真が映る、というひとつのシステムが好きだ、という。そして、写真のテーマとしては、自分の感情に正直に、大好きなサッカーを追求した。又、サッカージャーナリスト写真家の宇都宮徹壺<sup>14</sup>の地域リーグがテーマの著書や、欧州の辺境地のフットボール分析に影響され、写真家の彼の考え方など手本にしている。

2012 年 11 月 11 日、シーズン最終節 FC 町田ゼルビア VS 湘南ベルマーレの試合の取材写真を研究発表とした。この試合は FC 町田ゼルビアは J2 残留、湘南ベルマーレは J1 昇格が決まる試合である。以下、本人のサッカー考察観より。

僕は「サッカーの力」と「つながる力」を、今ひしひしと感じている。

サッカーに感謝して、サッカーに恩返ししたいけど…。

そして、自分が何を出来るか考えた。

近くにいてくれた FC 町田ゼルビアと向き合い、ただひたすらがむしゃらに写真を撮った。

サポーターがチームを応援する姿。チームフラッグにプライドをささげる姿。

遠く離れた旧友との再会。

サッカーを通じて、いっしょに、よろこんだり悲しんだり楽しかった。

もっとサッカーで輪を広げたい。

神山君は写真表現世界と同時進行で、独自の詩感の世界を表現していく傾向がある。そこに、ささやかで若さゆえの目的と感性があり、写真表現は気取りがなくストレートである。この個性が、現在勤務している IT 会社の HP 写真を担当することに繋がった。

彼との LINE では、当時その内定中の IT 会社の研修報告もあった。以下、LINE 履歴から。

神山「先生、そういえば 8 日に、会社のレポート課題を先生に見ていただくのを忘れていました。今週から本格的にネットワーク機器を操作する研修に入りました。」

筆者「レポート課題、明日相談に応じます。」

上記以外にも、神山君の初研修の朝、励ましの LINE のやり取りは、自主ゼミ 3 学生と筆者との LINE 上でのチーム連携があり、LINE スタンプ<sup>15</sup>やらトーク<sup>16</sup>は実に賑やかで

ある。そこには、神山君がまっすぐ社会というエリアを見つめ、そこにポジショニングをあわせようとする意識がLINE履歴に伺える。筆者にはその履歴から、本人が卒業後の価値観へ合わせることに必死で、純粋さを失わずにタフであり続けようとする訓練の様に思えた。以下、神山君の制作キャプションと作品を紹介する。

### spectacle

#### 「360°フットボール」

スタジアムで出会うフットボールの興奮は、どんなに大きいテレビでも味わえない。

2012年11月11日、J2残留をかけるFC町田ゼルビア対J1昇格をかける、湘南ベルマーレの試合を観て、  
ぼくは それを痛感する。

この試合の結果でチームの未来が決まるとあって、サポーターは目の前で起こるプレーの一つ一つに、  
歓喜し、怒り、悔しがり、感激していた。

エンブレムが描かれた、チームフラッグという誇りを掲げ、

声を出しつづけるサポーターからは力強さを感じた。

湘南ベルマーレの勝利が決まった瞬間の、歓喜に満ちあふれる黄緑と、

それを見つめる青の対照的な表情は心に深くきざまれた。

試合後の雨は、きっとFC町田ゼルビアの涙だったのだろう。

スタジアムの中は、混じりっけのないフットボールだけの空間。ぼくはスタジアムでがむしゃらに写真を撮る。



写真 / spectacle 360°フットボール 51.5cm × 72.8cm

神山君の写真の指導には、造形デザイン専修篠原邦博先生のご厚意に感謝申し上げたい。



そもそも、この自主ゼミの教育チームプレイスタイルは、「LINE 上で欧州サッカー好きの僕たち3人と先生と、サッカー談義をしよう!」という横澤君の発想から始まり、筆者と3学生の共通LINEと、それぞれの学生の個人LINEが通り、成立した。共通LINEではタイムリーな、宇都宮徹壺氏の写真展見学会プランから、就職内定報告、作品制作中の相談を誰かがしゃべり、誰かが答える。また、学内でのサッカー遊びの写真画像を上げ、筆者が話しかけ、誰かがスタンプした。時には公式の筆者のゼミ学生作品展(後輩3年生の作品展)の鑑賞レポートを論じ、我々周辺での喜怒哀楽の出来事など、フットボール以外の事も実によく語った。たかが、フットボール。されどフットボールというフィルターを通して、思いつきのLINEで繋がり、そこに筆者はさりげなく指導をアプローチした。そしてLINEの記録は、その時々、その時期の大切な学生の感受性の記録といえよう。

大学教育のプロセスは、4年間で様々なことが起き変化する。時に流動的で、フットボールのリーグ戦に番狂わせが生じる様な、ドラマがある。それは学生の資質を開花する事による楽しさや醍醐味で、教育現場は生きている実感があり、教育者はこの仕事を誇りに思い、常に時代と向き合い新しい良い事を吸収して、教育理念を更新していくべきと思う。

### 3. 具体的発表例 「基点と起点(Basic & Challenge)への波及効果へ」

3学生の研究発表は、学外の制作研究発表会へ展開していった。アトラボはしもとでの「基点と起点(Basic&Challenge)」について報告する。以下、概要である。

2013年2月18日(月)～3月3日(日)の間、相模原市「アトラボはしもと」(相模原市美術館将来構想への試行段階として桜美林、多摩美、女子美、東京造形の4大学による仮設ギャラリーでの企画展プロジェクト)において、桜美林大学総合文化学群として初の試みの学外研究発表会は、造形デザイン専修を中心として、企画展「基点と起点(Basic&Challenge)」による地域交流と研究発表を実行した。

筆者は、その全プロデュースを桜美林大学地域連携推進室、アトラボはしもと学芸員、代表学生と共に運営した。造形デザイン専修卒業研究選抜作品展と他作品展、初日のトークショー、土日開催のワークショップ、カフェ、他専修イベントもあり、当初のプランの突発的美術館のイメージのように、充実した空間になった。進行業務、受付など、4年生代表者、藤崎ゼミ学生(当時の次期ゼミ学生、3年ゼミ学生)が積極的に動き、ご来場の他大学教員は「学生が自主的に動いている感じがします」との感想である。ここで、筆者は、下級生を育成していくこと、後輩学生を少し前進させ成長させる教育効果を意識した。



自主ゼミ3学生の研究発表は「ART&SPORT フットボールと造形美術・デザインの表現」であり、他美大との差異の企画で、彼等の卒業研究制作作品をより探求した総論である。

これは「基点と起点(Basic & Challenge)」というスローガン企画展に際し、ひとつのカテゴリーとしてフットボールに関する様々な表現研究発表コーナーである。表現者は自身を基点として起点を見つけ、発想へつなげる。フットボールを観戦し、楽しみ、考える事から、何かを発見し、表現に活かした。フットボールにおける表現と考察、研究というシステムの具現化である。

それに連動し、会期初日キックオフイベントでのトークショー「フットボールが教えてくれたこと」は、筆者友人のサッカージャーナリスト写真家宇都宮徹壺氏が基点となった。これは、アートもスポーツも国境を越えるものであり、フットボールのシステムは教育のあり方と類似している。それは、人と人をつなぐ、パスとパスをつなぐ、時に学生と教員をつなぎ、次世代につなぐこと、という筆者の発想を宇都宮氏に提案しての実現である。指導者は若者を育成していく使命がある。教育理念とはフットボールの育成支援のシステムの様である。そして宇都宮氏は、トークショーを授業を意識した空間として構成した。

#### 4. 学ぶべき者と教える者の共存性

学生と教育者は、共存していく事が大切で、信頼し連携していく。教える者は、指導や教材に関し、時代に即したアイデアの応用が必要であると思う。

時に、大学教育とは1単位45時間の学修時間の基準や、履修ガイドやシラバスの規定の枠組みを越えた時に、意義が明確化し効力が高まる事がある。その学生の人生観や思考は、規定のガイドライン内では気付かず、不明瞭な事もありえる。学生がこんなことを考えているという事、例えば、アスリートを越える世界の名フットボーラーのナショナリズム考察、日韓文化交流考察、地域リーグに見える文化とドキュメント。それを基に語ること、向き合うこと、フットボールを通じて、多くの雑談、コミュニケーションから学生の造形表現、分析、考察にたどりつき研究へ。そして教育の形のゴールをいつも、いくつも見つけ、見据えていくことは、学ぶべき者と教える者との共存性が生産する。

フットボールとの出会いはゲームソフトによるサッカーゲームからの、新時代情報に始まる。彼等にとり当たり前のLINEコミュニケーションにより、情報化革命が可能にした教育効果では、学生はフィールドの選手であり、この教育システムを応用した教育のあり方を筆者は発想した。筆者の恩師、武蔵野美術大学甲田洋二学長は次の様に、述べられた。

小中高教育で美術の時限数が削減しているが、美術、絵画こそが教員と生徒の上下関係が関係ない科目である。音楽は少し違うかもしれないが、小学生の作品感性が美術教員を上回る、という状況はこの科目、学問の素晴らしさである<sup>17</sup>。

筆者は、美術、デザインという学問では、導く者が導かれる面々に導かれる楽しさがあると考える。そして、自分が発想する理念、美観、美意識を学生に伝える。それは、この指導・教育という仕事を大切に思い、現実と向き合い、この仕事での成長が繋がっていくようにと願うからである。

時に、フットボールでは名将の言葉から教育理論を学ぶことが出来る。マンUことマンチェスターユナイテッドFC<sup>18</sup>を26年半率いて、2013年に勇退したアレックス・ファーガソン監督<sup>19</sup>は以下の様に、伝えている。(Newsweek ニューズウィーク日本版、2013)

(マンUのホームスタジアムである)オールド・トラフォードの近くで生まれた選手を集めてもチームにならない。地元の選手だけではヨーロッパでは勝てない。

そういえば、大学教育もグローバルな文化・表現・学問・価値観の中で啓発し合い、教員、学生が共に成長して生きる力を身につけ、強くなるのかもしれない。

フットボールは文化、教育、色々と多角的に考察できる。そして、フットボールの試合のキックオフは、すべての事象において、何かをはじめ、基点で起点となること。教育は、はじめてみる事が大切であり、とりあえずなにか創ってみる。キックオフしていくことで、人を時々成長させていくかもしれない。「アートラボはしもと」での企画展「基点と起点(Basic&Challenge)」の研究発表は、何かの象徴か啓示の様に思えてならない。

## 5. 結語

卒業後、この自主ゼミ3学生はLINE ツールなどで、それぞれの場所で、それぞれのポジションで、それぞれの社会での戦いと戦術を報告し続けている。そして、それは変わらずフットボールでつながっている。

筆者は、情報化の究極の恩恵であるLINEにより、社会へ旅立った彼等の成長を伺えることは教育者として幸せなことである。つながっていくこと。ボールとボールをつなぐフットボール、学生と教員をつなぐ教育、過去と未来と現在をつなぐLINE。そのLINEで場所と時間をつなぐ。それらのつながりは、カテゴリーの違うつながりではあるが、重要な何かが見える。LINEの履歴は自主ゼミ3学生と共に、時に表現領域における戦術を語り、時に社会というバイタルエリアへの戦術を語り、筆者は3学生を鼓舞して共存性を維持しながら「基点と起点(Basic&Challenge)」の「ART&SPORT フットボールと造形美

術・デザインの表現」研究発表という、ファイナルへ進むため共に歩んだ。その記録の足跡をたどり、振り返り、この論考を記している。そして、ART と SPORT の接点とは、どちらも空間認識能力が必要であると気付いた。物事を構築していく能力、視覚情報の把握と創造力、意識が画面やフィールドにどう作用していくか、ART と SPORT の共通要素項目であると捉える。

結果、総合大学における、造形美術デザイン教育4年間の教育システムでは、3年次までに、学生は表現を形にすること。それは、学修成果の表現を「自分はこう考える」と、具体的に展示発表できる強さをもつことであると思う。4年次では、その先にあることを分析、考察、表現、研究して、卒業前の研究の総論に結びつける。

筆者は2012年、喜怒哀楽の教育の時間の中で、指導教育の指針が明確化した。それは、フットボールが教えてくれたことだったのかもしれない。様々な出会いに感謝している。

## 6. 謝辞

本稿の執筆にあたり、ご指導頂いた恩師の武蔵野美術大学小石新八先生、小井土満先生、桜美林大学の倉澤幸久先生に深くお礼申し上げます。ありがとうございました。

### 注

- 1 2011年6月にサービス開始した、無料で通話やメールが出来るコミュニケーションアプリ。
- 2 スペインサッカーにおける下部組織のことで、育成機関である。
- 3 立体派の意味。20世紀初めにピカソ、ブラックにより興された芸術運動。
- 4 プロサッカー選手日本代表。2013年9月時点、ロシアのプレミアリーグPFC CSKA モスクワ所属。
- 5 プロサッカー選手ポルトガル代表。2013年9月時点、スペインのリーガ・エスパニョーラレアル・マドリード C.F. 所属。
- 6 プロサッカー選手オランダ代表。2012年 LINE 履歴の時点では、イタリアのセリエ A の F.C. インテル・ミラノ所属。2013年9月時点、トルコのスーパー・リグのガラタ・サライ SK 所属。
- 7 サッカーのクラブチームでイタリアのセリエ A のビッククラブ。
- 8 プロサッカー選手で日本代表。2013年9月時点、イタリアのセリエ A の F.C. インテル・ミラノ所属。
- 9 日本画の絵の具のこと。鉱物や岩石を砕いた天然絵の具から、ガラスを精製した新岩絵の具があり、粒子状で膠水で溶いて使う。色数が豊富で粒子の大きさによって色の濃度が違う。
- 10 PC用語で、画像を層の様に重ねて構成する処理機能の事。

- 11 プロサッカー選手スペイン代表。2013年9月時点、スペインのリーガ・エスパニョーラ FC バルセロナ所属。
- 12 サッカーのクラブチームでスペインのリーガ・エスパニョーラのビッククラブ。
- 13 プロサッカー選手スペイン代表。2013年9月時点、スペインのリーガ・エスパニョーラ FC バルセロナ所属。
- 14 写真家。東京芸術大学大学院美術研究科修了。フットボールと文化をテーマに世界中を取材する。第20回ミズノスポーツライター賞最優秀賞を受賞。
- 15 コミュニケーションアプリ LINE でのメッセージイラストのこと。
- 16 コミュニケーションアプリ LINE でのメッセージ文章のこと。
- 17 2012年11月「甲田洋二—修羅と日常」展 記念公開座談会—絵の話はやめよう—より。
- 18 サッカーのクラブチームでイングランドのプレミアリーグのビッククラブ。日本代表香川真二が所属している。
- 19 サッカー史上、最も成功した監督といえる。長年の功績から「ナイト(卿)」の爵位も授与された。

#### 参考文献

- ・2009年12月12日付 朝日新聞朝刊 全面広告 武蔵野美術大学80周年記念フォーラム世界美術大学学長サミット シカゴ美術館付属美術大学総長トニー・ジョーンズ先生基調講演「美術・デザイン教育における課題と挑戦」
- ・『図解日本画用語辞典』 東京芸術大学大学院文化財保存学日本画研究室〔編〕2007
- ・宇都宮徹壺著『ディナモ・フットボール 国家権力とロシア・東欧のサッカー』みすず書房 2002
- ・筆者作成『桜美林大学芸術文化学群(総合文化学群)造形デザイン専修学びの履歴書』2013
- ・2013年6月4日『Newsweek ニューズウィーク日本版』Vol.28 NO.21(通巻1351号)ファーガソンが語る監督人生